

氏名	河田綾
学位の種類	博士(文学)
報告番号	甲第527号
学位授与年月日	2020年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	安部公房小説作品研究——1960~70年代をめぐって——
審査委員	(主査) 石川 巧 (立教大学大学院文学研究科教授) 金子明雄 (立教大学大学院文学研究科教授) 鳥羽耕史 (早稲田大学文学学術院教授)

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文の構成

序章

第一章 「われわれ」の行方——『砂の女』・「人魚伝」

第二章 〈中折れ〉する「ぼく」——『他人の顔』

第三章 「はったり」を編む——『榎本武揚』

第四章 失踪の修辞法——『燃えつきた地図』

第五章 空白の「イメージ」としての〈安部公房〉——「周辺飛行」

第六章 「箱」の中のオナニズム——『箱男』

第七章 両義性の「襦」——『密会』

終章

参考文献リスト／初出一覧

### (2) 論文の内容要旨

本論は、1960～70年代に書かれた安部公房の長篇小説を中心に精緻な作品分析を行うことによって、その世界観や作家としての到達を明らかにし、読書行為によって構成された安部公房という作家のイメージを考察したものである。

第一章では、1962年に発表された長編『砂の女』と短篇「人魚伝」を論じている。この年、安部公房は『砂の女』を書くことでアメリカや日本共産党との関係をめぐる1950年代の政治的問題意識に見切りをつけ、芸術的前衛としての歩みをはじめていく。『砂の女』はその転換点に書かれており、安部の作風が短篇小説から長編小説へと移行する契機となった作品である。また、安部はこの年「人魚伝」という短篇小説を発表して「女と理解し合うことのできない男」というモチーフを追究しはじめる。『砂の女』と「人魚伝」は、女との断絶によって自己の内に複数の自己を招来するようになった男が自問自答の坩堝に陥る物語であるという点で共鳴している。安部は、自らの物語世界に閉じこもろうとする男たちに「われわれ」という人稱を与え、ジャンルの異なる二つの小説において分裂・増殖する主体という問題に迫ろうとしたのである。本章では、この「われわれ」という人稱を同時代の文脈と接続し、日常の危機が物語と化しその物語から抜け出せなくなる主体のありようを考察している。

第二章では、1964年に発表された『他人の顔』を論じている。1960年代半ばは〈性〉のありようが文学的なテーマとして浮上し、多くの作家が〈性〉をどのように表現するかという問題に直面した時代であった。安部もまたそうした文学状況を鋭敏に察知し、液体窒素の事故によって顔に火傷を負った男が仮面を被って自分の妻を誘惑して性的関係の回復をもくろむ物語を描いた。本章において特に注目したのは、妻に宛てた「ぼく」の手記が極めて独善的に紡がれる点、当初、性的関係を回復するため手段であった仮面が、やがてひとつの人格を持つようになり、逆に主人公を脅かすようになる点である。「他人」の仮面を着けた「ぼく」は「痴漢」のように妻に迫ろうとするが、その行為は最後まで完遂されることはなく、「ぼく」の欲望は常に途中で頓挫する。また、作品内ではその状態が〈中折れ〉のメタファーで語られる。本章では、男の欲情が最後まで自己の内面で空転し、他者としての妻に向かって開かれていかないことを問題化し、それを同時代における〈性〉表現のありようと接続させるかたちで論じている。

第三章では、1965年に発表された『榎本武揚』を論じている。本作はこれまで安部の政治的「転向」を

描いた作品として読み継がれてきたが、本章では、この作品に描かれた榎本武揚を単純な転向／非転向の図式から解き放つことをめざした。「忠誠」でも「反逆」でもない「第三の道」を模索した人物として捉えた。そして、この「第三の道」はいかなる方法によって可能であるかをめぐる問いこそが安部のモチーフであったことを明らかにした。具体的には、この作品における榎本武揚が「稀代の話し上手」と評され、「はったり」を駆使して聞き手を混乱に誘う存在である点に注目し、「はったり」の語りもたらす効果を分析した。また、こうした榎本の「はったり」は、本文の記述者兼編集者である「私」の介入によって真偽を一層不確かなものとし、最後は謎そのものを読者に投げかけるかたちで閉じられている。つまり、安部にとって重要なのは、事の真相ではなく「はったり」を駆使する語り口そのものであり、小説という方法はその実践として機能しているのである。日本共産党除名以降、政治的運動から身を引いた安部は、小説を書くという行為のなかに「第三の道」を見いだそうとしたというのが本章の結論である。

第四章では、1967年に発表された『燃えつきた地図』を論じている。本作の主人公「ぼく」は、自動車を駆使して失踪事件を追う探偵である。だが、謎に満ちた依頼人の女とのやりとりを経て、「ぼく」は次第に自己のアイデンティティを見失い自らも失踪者となってしまう。本作では、自動車運転によって生れる速度感覚の攪乱が人々を失踪へと誘うこと（＝眩暈の感覚）に注目し、そうした感覚を言語化するために安部が用いた修辞や表記の工夫を明らかにしている。また、この作品が探偵小説の形式であるにもかかわらず、事件の解決をもくろむ探偵自身が眩暈の感覚に陥り、逆に謎が新たな謎を作り出す転倒の構造もっていること、本作の語りにおいては主人公が現実世界における安定した足場をもち得ていないこと、主人公の失踪という事態によって読者も眩暈の感覚に陥る仕掛けがなされていることを論じている。

第五章では、1971年3月から1975年6月にかけて新潮社のPR誌に連載された「周辺飛行」を論じた。連載時に「創作ノート」と位置づけられたことも相俟って、これまで「周辺飛行」は特定の小説作品を読み解くための補助資料、あるいは、安部の方法意識を探るための手がかりとして参照されることが多かった。それに対して、本章では、「周辺」であるということはどういうことか？ という点そのものを認識の枠組みとして考察をはじめている。同作を、断片的なイメージが言語化され作品として結晶する過程を描いた作品として位置づけ、作者がどのようにして構想や着想を紡ぎ出していくのかを追ったメタ的な小説として論じている。「周辺飛行」は様々な文章スタイルを取っており、いかにも雑多な「創作ノート」という印象を与えるが、安部はさまざまな文体を駆使することで、逆に複雑な「因果律」に絡め取られる物語を破碎し、「ニュートラル」になることが志向されている。ときには、演技論の体裁で「イメージ」の構築が主体の身体性と密接な結びつきをもつこと、ひとつの「意味」に収斂されない身体表現のありようを説きつつ、それに反発せずにいられない作家の苦悩が吐露されている。安部は、言葉を乗り越えるために言葉を生み出し続けるというジレンマを抱えつつ、言葉を空白化し続けることで、統一的な作家像には辿り着かない空白化した「イメージ」を遂行的に立ちあげようとしたのである。

第六章では、一九七三年に発表された『箱男』を論じている。『箱男』に関しては、これまで膨大な研究の蓄積がなされてきたが、その多くは「箱男」とは誰か？ という問いを発するところから議論を始める傾向があった。それに対し、本章は複数の書き手が錯綜する〈場〉あるいは機能としての「箱男」を焦点化し、「箱男」によって記述された言葉の特質を明らかにしている。また、「箱男」の語られ方として特に注目したのはオナニズムに関する描写の氾濫である。「箱男」は「箱」のなかで自慰に耽ることによって自己の身体のうち他者の身体を虚想し、分裂・増殖した「性的他者」を無数に立ちあげる。複数化した「箱男」は、その真贋および「彼女」を覗く権利をめぐる対立するようになるが、その一方で、自らの性的欲求に関してはエクスタシーを先延ばしにして持続する快楽を貪り続けようとする。また、真相、真実の所在を明らかにしようとするればするほどそれに失敗し、最終的に物事を決定不可能として処理する「箱男」的叙述によって、絶えず言葉の結びつきを脱臼させ、言葉が統一的に解釈されることを拒否する。安部自

身はそうした「箱男」について、「人間が民主主義の原理として憧れている」極限の姿として位置づけているが、その言説に従うならば、「民主主義の原理」として造型された「箱男」は「近代の徹底」がもたらした人間の姿そのものということになる。

第七章では、1977年に発表された『密会』を論じている。本作は病院を舞台とし、それを弱者と強者、異常と正常、病気と健康といった二項対立の論理に支配された空間として描いている。そこに紛れ込んだ「ぼく」もまた次第にそうした病院の論理構造に絡め取られていくが、やがて、対立関係にあるはずの二項が絶えず交錯、溶解、混線していることに気づきはじめる。あるとき「ぼく」の前に「溶骨症」の少女が現れる。少女は助けを借りなければ骨が溶けて体の外形が保てないという奇病を患っている。「ぼく」は自らの保護欲求を満たすべく少女に近づくが、「完全患者の魂」をもつ彼女の前では弱者と強者、異常と正常、病気と健康といった対立軸が意味をなさないことに気づかされる。こうして、「ぼく」は少女とともに、あらゆる対の論理が無化された時空間に取り残される。そこには、生と死の二項対立が折り畳まれた世界、すなわち「死につづける」状態が描かれている。そうした状態にこそ人々の「愛」や「希望」が生き延びられる地平があるという認識が示されている。安部は、この作品を通して弱者が「愛」や「希望」をもち続けることができる〈場〉を生成しようとしたのである。

以上の分析を通して、小説を自立した世界として構築するために安部がどのような表現を駆使したのかを考察した。安部にとって小説は「言葉によって、言葉にさからう」行為であったこと、「反体制的」な力を具備させるための方法的実践であったことを論じた。

## II. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

1997年から編年体の『安部公房全集』（新潮社）が刊行開始になったことにより、安部公房研究は質量ともに活況を呈することになった。作家としての軌跡を通史的かつ俯瞰的に読むことができるようになったことで、特定の領域に囚われないメディアの越境者としての安部公房像に注目が集まるようになった。小説はもとより、数多くのラジオドラマ、テレビドラマを執筆し、演劇集団「安部公房スタジオ」の活動、写真と文章を組み合わせたフォトエッセイなど多様な領域で活躍した安部公房は、近代日本が育ててきた文学風土を見事に切り離している点において異端だが、一方で彼の小説は国際的にも高く評価され、世界中で幅広く翻訳されている。逆にいえば、安部公房を小説家という肩書きだけで論じるのは極めて困難だと考えられてきた。

本論は、そうした「運動体」（鳥羽耕史）としての安部公房が、なぜ生涯に亘って小説の執筆を止めなかったのか？ 彼にとって小説を書くという行為はどのような営みだったのか？ という問題編成から出発し、彼が短篇から長篇へと創作方法をシフトさせた1960～70年代にかけての小説を論じている。長い時間をかけてひとつのモチーフを掘り下げ、物語世界を完結させるために、彼がどのような方法と表現を駆使したかを明らかにしている。

本論の特徴の第一は、多種多様な修辞や寓意を用いて現実を再構成した安部公房の長編小説を年代順に並べ、その方法やモチーフの変遷を辿りつつ、彼の文学に内在する時代への批評性を詳らかにしていることである。『砂の女』や『箱男』をはじめとして、安部公房研究はこれまでに膨大な蓄積を有しており、様々な観点から議論が展開されているが、徹底して小説の言説分析に拘り、安部公房の代表的な長編小説作品をほぼ網羅するかたちで論を展開した点で、研究の新しい領域を切り拓いたといえるだろう。

特徴の第二は、安部公房の長篇小説が「言葉によって、言葉にさからう」身振りをともなっており、言

葉で表現された世界をいったん空白化したうえで再びその言葉を乗り越えていく構造をもっていることを明らかにし、それを可能にする修辞法や表記の仕方を実証的に説明した点である。彼の作品には、自己の身体のうち他者の身体を想像し、アイデンティティを無数に分裂・増殖させる男、強者と弱者、異常と正常、生と死といった二項対立の論理が意味をなさないような時空間に取り残される男が頻繁に登場する。彼らは他者とのコミュニケーションに失敗し続け、やがて自らを名乗る言葉を喪失していく。本論では、そうした主人公たちの転落や逸脱を執拗に追い、既成の言葉が身にまとう意味を失効させつつ言葉が生き延びられる場所を探そうとする作家・安部公房の戦略に迫り、彼にとって小説はそれを可能にする方法的実践であったと論じた。

特徴の第三は、M・フーコーの〈作者〉概念、ヴィリリオの〈速度〉論、金塚貞文のオナニズム研究、ドゥルーズの〈褻〉という概念などを駆使して安部公房を理論的に読み解こうとしている点である。本論の記述はその多くが作品内在的な視点での分析であり、安部公房の創作意識を作家論的な方法で浮き彫りにしているが、それらの批評理論を適切に参照することによって、安部公房の小説世界は同時代の思想的文脈との接点を持ち得た。本論は、その意味において、安部公房という作家を異端のレットルから救出し、1960～70年代の社会やそこに生きた人々の認識と接続させるための通路を開いた研究であるといえる。

## (2) 論文の評価

先行研究や安部公房に関する諸言説を適切に踏まえつつ、これまでの研究を乗り越えていこうとする研究姿勢を堅持し、各章において、高い学問的価値を有する分析が精緻に論述されている。特に、安部公房の文学作品を新たに読み直すだけでなく、数多くの長篇小説を書き連ねるなかでできあがった〈安部公房〉の作家イメージが1960～70年代の日本社会や同時代の文学状況とどのように照応していたのかを炙り出している点、“安部公房という作家にとって小説を書くという行為がどのような営みであったのか、”という問題編成のもと、その方法意識、修辞技法、表現の特徴などを明らかにしている点において、高い学術性を備えた論文である。